YUIMA NAKAZATO

Couture Collection Spring/Summer 2023

INHERIT

YUIMA NAKAZATOは2023年1月25日、13度目のオートクチュール ・ウィークへの参加となる2023年 春夏コレクション INHERIT を、現地パリでのランウェイ・ショーを通じて発表いたしました。

クリエイティブ・ディレクション：YUIMA NAKAZATO
ヘアメイク：計良宏文 for 資生堂
スタイリング：Robbie Spencer
音楽：[坂本 龍一、Senjan Jansen]
紙の彫刻 INHERIT 制作サポート：セイコーエプソン株式会社
※彫刻は、中里が訪れたケニアのゴミ捨て場での体験を再現するため、上空から撮影した写真を紙にプリントした。
使用後の作品は回収。エプソンの技術を活用し、別の用途としての再利用を検討。

デザイナー・メッセージ

今、世界中で行き場を失った大量の衣服たちがケニアに流れ着き、処理しきれず放置され、社会問題となっているという。私は衣服をデザインする者として、自らの目でその状況を見てみたいと思い、ケニアへ旅立った。

おびただしい量の衣服たちに出迎えられ、圧倒されるところから旅は始まった。衣服のゴミの山を眺めながら、デニムやTシャツなど、この地球上どこでも安価で画一的な装いが広がりつつあることを実感し、絶望的な気持ちになっていく。もうこれ以上、人類は衣服は作る必要はないのではないか・・・

ナイロビから北ケニアの奥地に移動した時のこと。気候変動により深刻な水不足が広がる砂漠地帯に、部族の人々が暮らしていた。カラカラに乾燥する赤茶色の砂一色の景色の中に、オレンジや緑、紫など鮮やかな

布を体に巻き付け、ビーズのネックレスやイヤリングなどを身に纏う人々に、目を奪われた。生きるか死ぬかという過酷な環境下においても、人は装いに装飾性を必要とするという事に、私はとても感動してしまったのだ。

手間と時間をかけて手作りし、親から子へと受け継がれていくビーズの装飾は、現代社会に広く行きわたった装いとは対極にあるものかもしれない。砂漠で見たあの美しいビーズの装飾は、いつまであそこにあり続けることができるのだろうかと、ふと不安になった。

タイトルのINHERIT(受け継ぐ)は、干魃の厳しい不毛の地であっても、それらを手放すことなく伝統的な装いや家畜を飼いながらの生活を受け継ぐ部族の人々から、人類はこの地球をどのように未来へ継承していくのかを改めて問われたように感じたことに由来する。絶望するのではなく未来を考え続けていく覚悟を、この言葉に込めた。

中里唯馬

衣服の未来を豊かにするためのアクション

アフリカから150kgの古着を日本に持ち帰ってきたところから、このコレクション制作は始まった。大半の衣服には品質表示が無く、何の素材で作られ、どこで作られたものなのか不明であった。こうした服は一般的にリサイクルすることが非常に困難であるが、セイコーエプソンのドライファイバーテクノロジー*1を駆使し、新たなテキスタイルへと再生し衣服を作っていった。まるで、行き場の無い衣服たちをレスキューしているような気分だった。

また、今回は、アフリカで見た景色から、カラーパレット、テキスタイルに印刷するグラフィックを考えていった。ゴミ山でカラフルなプラスチックが太陽の光に反射しながら、自然発火する煙と入り混じっていた光景、砂漠の乾燥した空気の中で鮮やかなテキスタイルやビーズを纏う人々、カラフルな古着たちが地面に散乱し、その上を人々が行き来する景色に、人間の醜さと美しさの両面を感じ心を動かされた。今回のケニアの旅では、干ばつの厳しい地域を訪れ、水の貴重さを身をもって体感した。

セイコーエプソンのデジタル捺染技術を使用し、アフリカで感じたことを布に印刷していくにあたって、水の使用量を抑えながら加工することの大切さを噛み締めることができた。会場造作には、ゴミの山で撮影した写真を印刷し、人間の営みにより破壊されゆく地球、その姿を表現した。

そして、干ばつが厳しい東アフリカ最大の砂漠で拾ってきた石を、女子美術大学日本画研究室が研究する、天然顔料のサブミクロン・ナノ粒子技術によりナノサイズにまで粉砕して染料とし、Spiber社の開発する人工合成タンパク質素材、Brewed protein™素材に染色を施した。砂漠で見た赤茶色の景色が、人工合成タンパク質素材に宿っていく様子は、暑く乾燥したアフリカの空気が布に宿されていくようでとても美しい現象であった。

北ケニアの奥地に住む部族の方々に、家畜の皮を用いた伝統的な衣装を見せていただいた。家畜を食べ、衣服にし、家にもする。衣食住の全てを家畜から摂取する極限にシンプルな暮らしに感動し、私たち人類の全てはここから始まったのだと感じた。

部族の人たちが布を体に巻き付けている姿は、日本の着物を彷彿とさせる。布をほとんどそのまま使用した服を、老若男女がそれぞれの身体にそわせて着こなしを楽しむ。着物をインスピレーションに、YUIMA NAKAZATO でこれまで取り組んできた長方形から立体造形を作り出す独自のパターンメーキング技術をさらに進化させ、サイズやジェンダーへのアプローチの再解釈を試みた。

また、今回のコレクションの制作ストーリーを、映画監督の関根光才氏により、ファッション産業の未来を問う、ドキュメンタリー映画として今夏に公開予定である。YUIMA NAKAZATOは、これからも、この世界に表出するさまざまな課題と対峙し、衣服を通して問いを立てることに取り組んでいく。

*1 多様な素材を繊維化し高機能化するエプソン独自の技術。詳細はエプソンのホームページをご確認ください。
www.epson.jp/prod/smartcycle/dft.htm

デザイナー・プロフィール

1985年生まれ。2008年、ベルギー・アントワープ王立芸術アカデミーを卒業。2015年に「株式会社YUIMA NAKAZATO」を設立。2016年7月には日本人として史上2人目、森英恵氏以来となるパリ・オートクチュール・ファッションウィーク公式ゲストデザイナーの1人に選ばれ、コレクションを発表。その後も継続的にパリでコレクションを発表し、テクノロジーとクラフトマンシップを融合させたものづくりを提案している。また自らが発起人となり、2021年7月より、未来を担う次世代のクリエイターのためのFASHION FRONTIER PROGRAMを創設。オートクチュール・ファッションウィークを通じて最先端のファッションを提案しながら、社会的課題にも取り組む。

Information

Instagram official account
https://instagram.com/yuimanakazato/

YUIMA NAKAZATO official website
http://www.yuimanakazato.com/

YUIMA NAKAZATO Press inquirires
press@yuimanakazato.com
KCD Paris bize@kcdworldwide.fr